田辺先生の事件簿

愛田雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
田辺先生の事件簿

【Ｎコード】
Ｎ０３４３Ｄ

【作者名】
愛田雅

【あらすじ】
新人教師として赴任した先の中学校は、とんでもない学校だった！新人教師：田辺陽子に難題が次から次へと降りかかる。「あなたに逢いたくて」の続編です。

ナイフにご用心1

春の香りがさわやかに感じられるころ、今日から、私は中学校の教諭として働くことになった。けたたましい音の目覚まし時計を止めると、あくびをしながら体を起こした。

とうとう今日から、学校の先生なんだ。一体、どんな生徒たちが私を待ってくれているんだろう。不安もあるけれど、期待の方が大きかった。

朝食は、しっかりと食べなくては。腹が減っては戦はできぬ。生徒たちにしっかりと教えてやれなくなってしまう。ご飯を味噌汁で流し込みながらあわただしく朝食を食べる。

「生徒になめられたりしてね」

「まさか。私の生徒が私のことをなめたりするわけないでしょう。副担任の若い女の先生をなめたりするかしらね」

妹の彩香に変なことを朝から言われて、ちょっと熱くなってしまった。

「そうかなぁ。ま、頑張ってね」

お気楽極楽な感じの言い方だ。妹は、まだ学生だから、仕方がないのかもしれない。

「じゃ、いってきまーっす！」

私は、元気よく家を出た。夢と希望に満ち溢れた教員生活を満喫させるんだ！という気合に満ち溢れている。

今日から、新しい生活が始まる。中学生の時からの夢だった中学校の教員としての生活がいよいよ始まるんだ。教育実習のときは、すごく楽しかった。生徒たちと仲良く学校生活が送れたんだ。すごく短い間だけど。今日から、また、学校生活が始まるんだ。

学校に着き、私は自分が副担任をやるクラスの先生を紹介された。その先生は、お兄さんが教育委員会で働いていて、親は、文部省に勤めていたという筋金入りの教育一家の人間だった。名前は、小林

健太郎。学校では、保健体育を教えている。
見た目は、頑固そうで強面と言ったところだ。青春ドラマの鬼教師がテレビから飛び出てきた感じだ。
これが、この学校のやり方なんだろうか？新人の教師には、こういう恐そうな先生とパートナーをわざと組んで、ビシバシと鍛えぬこうとでもしてるのか？それは、さすがに私の考えすぎかもしれない。
「先生、生徒になめられないでくださいよ！」
私が自分の席の前で、小林先生の顔をじっと見ていると、小林先生から発破をかけられた。
「はい、頑張ります！」
恐怖心も手伝って、私は大きな声で答えてしまった。
始業のチャイムが鳴ると、小林先生の後について職員室を出た。廊下を歩いている時も、小林先生は特に何も話してはくれなかった。新人の教師に対してアドバイスがあると思ったのだが、小林先生はずんずんと歩いて行ってしまう。私の心臓の鼓動は高鳴り、教室のドアの前で深呼吸をひとつした。
小林先生は、私の心臓など気にすることなく、教室のドアを開いた。私は、小林先生のあとについて、中に入った。中に入ったのはいいのだが…、私が教育実習のときに行った学校とは大違いだった。あの学校が良い学校だったのか。それともここの学校が野放し状態にされているのかはわからないけれども、とにもかくにもここの生徒は、あまりにもうるさすぎる。
男子も女子も先生が入ってきたことに気が付いていないのか、おしゃべりを続けている。教室を走り回る生徒も数人いる。これが、学級崩壊というものなのだろうか。私は、茫然と教室を見回してみた。
小林先生が教壇に立ち、生徒たちに向かって言った。
「コラ！静かにしろ！」
背筋がピンと伸びそうなおなかに響く声で小林先生は言った。こ

のうるさい若葉台中学校の生徒たちだって、この強面の先生を前にしたら、一瞬でおとなしくなるはず。
「では、出席を取るぞ。」
小林先生は出席簿を開いたが、教室は全く静かにはなっていなかった。
「小林先生、まだ、教室内がざわついていますけど…。」
「俺に口出しするなっ！」
なぜか、生徒ではなく私の方が怒られてしまった。
「はい！」
恐ろしくて、またも私は小林先生の言いなりになってしまった。その勢いを生徒たちにぶつけるべきだと思うのだが、小林先生は生徒たちにはかなり甘いらしい。生徒の名前を呼ぶことなく、全員出席にしてしまったのだ。教室を見回してみると、全員がそろっているとは思えないのだが。
そんなことを考えていると、突然、後ろのドアが開いた。一人、遅刻してきた生徒が入ってきた。
きっと注意をするだろうと、小林先生を見ていたのだが、小林先生は後方のドアを気にすることなく、今入ってきた生徒に目もくれなかった。
「えー、今日からこのクラスの副担任をやることになった田辺陽子先生だ。」
淡々とした口調で、小林先生はこちらを全く見ていない生徒たちに向って私の紹介を始めた。
「では、田辺先生、挨拶をどうぞ。」
そう言って、小林先生は私を教壇に立たせてしまった。
挨拶も大事ではあるが、私はひとつ唾を飲み込み、言いたいことを言うことにした。
「えっと、挨拶の前に一つ言いたいことがあります。遅刻をしてきた人が一人いますねぇ？正直に言ってください。」
小林先生が、私の上着の袖を持って、小さな声で言った。

「先生、そんなことはどうでも良いじゃないですか。早く挨拶を済まして、授業に入りましょう。」
筋金入りの教育一家に育った人間とは思えぬ発言を小林先生はした。肩書だけを見て、私はどんなに素晴らしい先生だろうと一瞬でも思っていたというのに、その思いはすぐに崩れ去って行った。
「しかし、こういうことは、今からちゃんとしておかないとろくな大人になりませんよ！」
「し、しかし…。」
私は、小林先生の制止を振り切って続けた。
「遅刻をしてきた生徒は、あなたでしょう？」
そう言って、私は、その生徒の前に行った。さすがに、この時は教室も静かになってきた。
「あなた、遅刻してきたでしょう？さっき、後ろのドアから入ってくるのをちゃんと見たんだから。名前は？何ていうの？」
私は、生徒に向って強く言ってみた。今の子供は、注意をされてもすぐに反省するとは限らず、中途半端に注意するとかえって、向こうが強気に出てくることもあるからだ。
「そんなの、あんたには関係ないだろう。さっさと授業でもはじめれば良いじゃねーか。」
早川君――座席表で調べた――は、反省の色もなく、しかも、私と目を合わせないでそう言った。
なんて態度だろう。教師に向って、反抗している。早川君は、椅子に浅く腰をかけ、足を大きく開き、威圧的な態度を取っている。
「あんたじゃないでしょう！先生って言いなさい。私は、田辺。さっき、小林先生が言ってたのよ。その時には、早川君だって、この教室にいたでしょう？もう二度と遅刻なんてしちゃだめよ。ちゃんと、遅刻ってつけておくから。」
「少しくらいいいじゃんかよーっ！」
「よくないから、つけるの！つけて欲しくなかったら、遅刻しないことね。」

そう言って、私は教壇に戻り、出席簿の早川君のところに遅刻ってつけようとすると…。

「わーっ！」

突然、教室中がどよめいた。何事かと思い、声のほうを見ると、早川君が私に向かってサバイバルナイフを向けていた。私を刺そうとしている。早川君は、血相を変えて私に向かってきている。

「うわー！」

他の教室にも聞こえるくらい大きな声を上げながら、早川君が教団にいる私にサバイバルナイフを向けてきた。

ナイフにご用心2

と、次の瞬間。
即座に早川君の腕をつかみ、そして、ナイフを取り上げた。小林先生は、何もしないで、ただそれを見ているだけだった。教室中がしんと静まり返っている。目の前で起きたことに、驚いているようだ。
「職員室に行くわよ」
私は、早川君の腕をつかんだまま職員室に早川君を連れて行くことにした。ホームルームの続きは小林先生に託した。
こういうこともあろうかと、大学のときに護身術クラブに入っていたのだった。まさか、初日から護身術を使うことになるとは、この先が思いやられる。
「まったく、どうして学校にナイフなんて持ってくるのよ」
廊下を歩きながら、私は早川君に話しかけた。
「・・・・・・」
早川君はふてくされた顔をするだけだった。
それ以上、私はなんて声をかけるべきかわからなくなった。仕方なく、無言で職員室へと向かった。
職員室に入ると、教頭先生が驚いた顔で私たちを見た。
「教頭先生。うちのクラスの早川君が、教室でナイフを振り回したので、職員室に連れてきました」
「あぁ、そうだったんですか」
教頭先生はしどろもどろにそう言うと、立ち上がり職員室の後方を見た。私も職員室の後方を見た。するとそこには、教育指導の熊野先生がいた。
「じゃあ、隣の進路指導室に連れて行きましょう」
「はい」
熊野先生が早川君の腕を持ち、三人で進路指導室に行った。進路

指導室はとても狭い教室だ。椅子は二人分しかなく、熊野先生と早川君が椅子に座り、私は立って二人の様子を見ることになった。
私は手に持っていた早川君のナイフを机の上に置いた。
「熊野先生、これが早川君が持ってきたナイフです」
熊野先生に言うと、熊野先生はまじまじと机の上に置かれたナイフを眺めた。しかし、熊野先生がそのナイフを手に取ることはなかった。
「そうですか。早川君、学校にはもうナイフなんて持ってきちゃだめだぞ！」
熊野先生の風貌はハッキリ言って温和そのものだ。まるでクマのぬいぐるみ。とはいえ、ベテランの教師であるのだから、ここから早川君に何かびしっと言ってくれるに違いない。
「・・・・・・」
早川君は、何も言わず、ただただうなだれているだけだった。さすがの早川君もベテラン教師には逆らえないのだろう。私は、立ったまま早川君を見ていた。
「よし、戻って良いぞ」
熊野先生は信じられないことを言った。もう早川君を教室に戻すらしい。早川君が立ち上がって進路指導室から出ようとしたので、私が早川君に「まだ駄目よ」と言ってもう一度椅子に座らせた。
「ちょっと待ってください。もっとちゃんと言った方が良いんじゃないですか？第一、早川君は教室で私が遅刻を注意しただけで、私を刺そうとしたんですよ！命の重さの大事さとか、モラルとか、ちゃんと説教をするべきじゃないですか？あんなことをしておいてすぐに教室に戻すなんて・・・・・・停学処分か何かを出した方がいいと思いますけど」
そう言うと、少し困ったような顔をされてしまった。そして、小さな声で・・・・・・
「田辺先生、あとでちょっと」
「はぁ…。」

結局、早川君は、すぐに教室に戻り、私はそのまま進路指導室で熊野先生と二人で話をすることになった。
「田辺先生。停学処分というものは、そう簡単に出さないほうが良い。田辺先生に向かってナイフを突きつけたようですが、別に先生は怪我をしていないんだし、今の親は、すぐに教育委員会だのなんだのって言うんですから、そんなことをしてはねぇ。わかるでしょう？」
熊野先生は私が怒り心頭に達していることに気が付いているようで、私をなだめるように言った。
確かに、今の親はすぐに教育委員会という言葉を出すようだ。だが、本当にそれでいいのだろうか。学校はサービス業ではない。教育業だ。親がお金を払って、子供が大人への階段を上るために必要な知識を、経験を習得する場所ではないだろうか。それなのに、教師が弱気な態度でいいとは思えない。こんな大人を見て育ったら、生徒たちはろくな大人になんてなれないだろう。
「だけど、一歩間違ったら犯罪なんですよ？私がもしも刺されていたら、どうするんですか？」
「まさか、そんなことをするはずがないでしょう。はっはっはっ！」
熊野先生は大きな声で笑った。
「笑い事じゃありませんよ。早川君は、鬼のような顔で私にナイフを向けたんですよ」
「田辺先生、何かの見すぎじゃないですか？」
冗談っぽい笑顔で熊野先生が言った。
「熊野先生、もっとまじめに考えてください」
「なあに、田辺先生が深刻にことを受け止めすぎるんですよ。ま、気楽にいきましょう」
そう言って、熊野先生は進路指導室を出て行ってしまった。完全に誤魔化して、いや、逃げていた。
だめだ。この学校は、腐ってる。本当に、私、とんでもない学校に来ちゃったみたいだ。これから、また、どんな事件が起きるか。

このままでは、本当に殺人事件が起きてしまうんじゃないかと思ってしまう。現に、私はもう少しで早川君に脇腹を刺されそうになったんだ。それに、欠席者も１０人くらいはいたと思う。私のクラスでこれだけの欠席者がいるということは、きっと、他のクラスにも欠席者は多いんじゃないだろうか。

それだけじゃない。この学校の悪いところは教師たちだ。生徒たちを保護者たちを怖がっているように見える。それでは、いい教育なんてできるはずがない。このままでは、この学校は崩壊してしまうかもしれない。

ナイフにご用心3

私は、怖くなった。テレビや新聞で高校生の殺傷事件が騒がれているが、もっと若い子が凶悪な犯罪を犯してしまったことさえあるんだ。それに、学校崩壊ということも言われている。それは、小学校の話であって、中学校ではないと思っていたけど、そうではないようだ。小学校で学級崩壊してるってことはその学校崩壊をした生徒が中学校にきているとすれば、中学校が学級崩壊しても不思議ではないんだ。

それに、あの学校はおかしい。私のクラスの担任の小林先生って、熱血教師？って思ったのに、全然熱血じゃない。それどころか、教師失格って感じがする。あの先生は教育一家のはずなのに、全然教師らしくないじゃない。一体、どんな家族なんだか・・・。

「田辺先生」

私が、放課後、職員室の自分の席で考え事をしていると隣のクラスの副担任の久保先生が私に話し掛けてきた。

久保先生は見た感じでは、とても若く、この学校の中では私の次に若い先生だ。年は３０代か、２０代なのか。

「あっ・・・久保先生でしたっけ？何ですか？」

そう言うと、久保先生は私に小声で言った。

「ちょっと、お話したいことがあるんですけど、今日、これから良いでしょうか？」

言い終わると、久保先生は空いている私の隣の席に座った。

今日の夜、新人歓迎会とかはないんだろうか？それとも、それはまた違う日にやるんだろうか？それとも？そう思い、聞いてみることに・・・。

「新人歓迎会とかはないんですか？」

そう聞いてみると・・・、

「この学校ではそう言うものはないんですよ。それで、ちょっとこ

の学校のことを教えといたほうがいいと思うんで・・・今日の夜でもちょっとお話をしたいと思いまして・・・」
私は、今日でなくても近いうちに歓迎会が開かれるものとばかり思っていた。幹事の先生が私に都合のいい日を聞いて、全員の都合のいい日をきめて、近いうちにやるものとばかり思っていた。
やはり、この学校は普通の学校とは違うのだ。
一つ溜息をつこうとしたが、隣に久保先生がいるので、ぐっとこらえた。
「普通、あるんじゃないんですか？」
久保先生は私にちょっとだけ近づくと、耳打ちをしてきた。
「僕は、2年前にこの学校に赴任したんですけどね。その時も何も行われなかったんですよ」
今日、この学校にきて、ずっとおかしいとは思っていたけれど、ここまでおかしいとは。この先、私はこの学校に居続けることができるのだろうか。だんだん不安になってきた。まだ、1日しかたっていないというのに。
私は腕組みをした。
「今日の夜ですか・・・」
「えぇ。どうです？学校の近くにいいお店があるんですけど」
職員同士で親睦を深める気は全くない学校なのだ。だが、久保先生はどうやら違うようだ。久保先生を味方にすることは、これからこの学校で教鞭をとる以上、いいことだろう。
一人でも味方を作っておこう。

そして、夕食を久保先生と食べに行くことになった。
中学校から数駅離れたところにある小料理屋に連れて行ってもらった。住宅街の中にポツンとあるのだが、中に入ると人であふれかえっていた。
注文を終えると、おしぼりで手を拭きながら久保先生が緩んだ表情で話し始めた。

「僕は、あの学校に来てまだ2年ですけどね。来る前から、というか前の学校でもうちの学校の噂はいろいろと聞いていたんですよ。」
「噂・・・ですか？」
私は、大学であの中学校の噂など一つも聞いたことがなかった。一体、どんな噂が流れていたのだろう。かたずをのんで、久保先生の言葉を待った。
「そう。あの学校は、ろくな教師がいないとかねぇ。それで、進学率は良いようなことを言ってはいるけれど。でも、それは、単にエスカレーター式に上の高校に入れるだけなんだけどねぇ。とは言え、それが売りでもあるんだけど。」
私が感じたことがそのまま噂になっていたようだ。ろくな教師がいないうえに、生徒も教師をなめているように感じられた。私の耳には入っていなかったけれど、あの中学校のことは小学生の間でも有名だったのかもしれない。
「他にも何かありましたか？」
私は、恐る恐る聞いてみた。
「えぇ、そうですねぇ、あの学校に入ってくる生徒は小学校のときに問題児だった生徒ばっかりだとか聞いたことがありますよ。」
他の学校が受け入れたくないような問題児を受け入れている・・・だとしたら、生徒が教師をなめるのもわかるような気がする。
「僕は、あの学校にだけは行きたくないなぁってことを思っていたんですけどねぇ。赴任が決まったときには、あの噂は絶対に嘘だ！と思って行ってみたんですけどね・・・。」
実際は、噂の通りだったという訳か。
久保先生は、お酒をちびちび飲みつつ続けて言った。
「あの学校に来て、思ったんですよ。このままではいけないって。この学校を変えなければならないって。でも、周りの先生はみんな敵って言うか・・・、交流もほとんどないんでね。でも、田辺先生は違う。田辺先生、一緒にあの学校を変えていきましょう！」
力強い言い方だった。気弱な感じの先生に見えるけれど、見かけ

によらず、熱血先生だったようだ。あの学校にも、まだ、希望の光はあるのかもしれない。久保先生と組むことで、少しはあの学校をいい方向へと持ってくことができるかもしれない。

一縷の望みが見えてはきたが、敵が多いことも忘れてはいけない。ただ、一人ぼっちではないのだと思うと、それだけで、緊張の糸が解かれていった。

「田辺先生は、大学卒業してすぐにうちの学校でしょう？大変ですよねぇ。」

どうしても気になってしまう、久保先生の口調。お酒が入っているのもあるとは思うが、なれなれしいというか、お調子者のような口調に感じてしまう。

「あれっ？田辺先生、全然食べてないじゃないですかぁ。どんどん食べてくださいよぉ！」

やはり、お調子者という感じがした。先ほど見た、希望の光は正しかったのだろうか。

ナイフにご用心４

大塚先生とは、中学のときからずーっと手紙のやり取りはしている。「年賀状出すから住所教えて～」って言って、ドキドキしながら、大塚先生の住所を聞いたことを、いまでも鮮明に覚えている。

たまに、「手紙の中で遊びに行っても良い？」って書いたんだけど、結局、一度も遊びに行くことはなかった。そう言えば、いつも大塚先生は、年賀状で「今年こそは彼女を作るぞ！」とか、「今年こそはお嫁さんをもらうぞ！」だとか書いてた。それを見ながら、「私がいるのに」って、思ったりもした。

会いたい気持ちが募って、何度か先生のうちの前までは行ったことあるんだけど・・・。会うことはなかった。

大塚先生は隣の学校にいる。最寄り駅は一緒で、私の初勤務の学校のことは、手紙に書いたのだった。でも、あんまりいいことは書いてなかった。大塚先生もあの学校のことはちゃんと知っていたんだろう。久保先生だって、前の学校にいたときに噂で聞いたくらいだ。大塚先生なんて、隣の学校に勤めてるんだ。この学校のことを、いろいろと知ってるんだ。だから、実態を教えて失望させたくなかったんだろう。

次の日、学校では噂が広まっていた。生徒たちの間では私のことが噂になってしまったらしい。と言うのも、昨日、私が早川君に対してしたことがこの学校に入る前に聞いていた学校の先生像と違っていたからしい。生徒たちもすでに、この学校がとんでもない学校だと言うことをしっかりと聞いていたのだろう。生徒たちは、この学校をなめきって、入学したということなのだろうか。

「田辺ってよぉ、先公のくせに、早川のナイフを取り上げたらしいぞ」

「マジかよ？生意気なやつだなぁ」

「初勤務だからなぁ。張り切ってるんじゃないのぉ？」
廊下を歩く私に、わざと聞こえるように言っていると思われる、他クラスの男子生徒たち。ブレザーのポケットに両手とも入れて、こちらに冷めた視線を送る。
そちらをちらりとも見ず、私は廊下を同じ速度で歩き続けた。
噂は、あっという間に全校を駆け巡ったらしい。彼らだけでなく、その後もずっと、冷たい視線を何度となく感じるのだった。
「先生」
廊下を歩いている途中、女子生徒二人が、私のところにやってきた。
「何、どうしたの？」
と、私が聞くと二人はうれしそうな顔をして。
「先生って、この学校の先生らしくないですね。私、安心しちゃった」
「私達は、この学校がろくな学校じゃなくてろくな先生がいないって聞いててすごく不安だったんですよ。でも、田辺先生は他の先生と違うし・・・、本当に安心しました」
碌な学校ではなくても、まともな生徒はいるようだ。
この二人は、私のクラスの生徒で、福島明日香と白田麻奈美であった。この二人は、問題児と言うか・・・小学校のときの成績がかなり悪かったらしい。
「確かに、この学校にはあまり良い先生はいないような噂があるみたいだけどねぇ。ま、何かあったら私に何でも相談してね」
そう言うと、二人は目を輝かせて、
「ハイッ！」
と、元気よく言ってくれた。

ナイフにご用心5

「良かったねぇ」
「うん！本当に良い先生みたいだね」
二人は、私と話が終わってからも私の話をしていた。
「私、絶対にこの学校にはきたくなかったんだぁ」
「明日香も？私もなんだぁ。だってさぁ、誰に聞いても良い事なんて言わないんだもん。あの学校の先生は全員やる気がない！とか言われちゃってさぁ」
「私も！だから、絶対に嫌だったんだけどねぇ」
「でも、田辺先生がいるから！」
「うん、やってけそうだよね！」
二人は、この学校生活に対して絶望していたみたいだ。私が、生徒だったとしても同じことを思っていただろう。誰に聞いても良い事は言ってくれないし、先生はやる気ないわでは、来る気もなくなるし、絶望したって仕方のないことだ。
職員室の雰囲気だって、最悪で、大体、しーんとしてて、たまに怪しげなひそひそ話が聞こえる。想像していた職員室の雰囲気とはまるで違う。
それに、まだ赴任したばかりではあるけれど、職員室に来る生徒を一人も見ていない。
職員室の時計を見ると、もうすぐチャイムが鳴る時刻であった。初授業から失敗しないように頑張らなくては。

キーンコーンカーンコーン
とうとう、始業のチャイムが鳴ってしまった。大急ぎで授業の準備をしていたのだが、あわてて準備をしている先生は、私しかいなかった・・・いや、もう一人だけ慌ててる先生がいた。それは、久保先生。久保先生は、この学校の中でもまともなほうの先生なのだ

から。
急いで教科書やノートを手に取ると、すぐに職員室を出た。
早歩きで、急いで教室に行き、ドアを開けると、そこは・・・
「ギャーッハッハッハ！」
「ブワーックショイ！」
「ちょー最悪ぅぅぅ」
ここは、動物園？と、勘違いしそうなくらいのうるささだった。
授業のチャイムなんてお構いなしなのか。小学校だってこんなにうるさくないと思うのだが。彼らの小学校は、うるさかったのだろうか。
「静かにしなさい。出席とるわよ」
そう言って、私は教壇に立った。
でも、教室内は依然として、うるさいままだった。私は、もう一度注意をすることにした。静かにならないと出席だってちゃんと取れないもの。他の先生は、黙って全員出席にしてしまうけれども、私は静かにした人間しか出席にしないつもりだ。
「静かにしなさい！静かにしないと欠席にするわよ！」
少し、興奮気味にそう言った。これでも、抑えていった。本当は、心の中ではもっと強く怒りたいくらいだった。でも、少し押さえ気味にした。生徒とけんかになどならないように。
しかし、依然として教室内はやはり静かにはならなかった。それどころか、私の声なんて全然耳に入っていないみたいだった。こうなったら、全員欠席にするしかないだろう。だが、よく見てみると、静かな生徒がいた。そう、静かな生徒とは、さっき廊下で会った福島さんと白田さん。この二人だけは静かにしていた。他は、全員動物だった。
「福島さんと白田さん以外は、全員欠席にするわよ！良いわね！」
と言うと、一人の生徒が反論した。
「何だよ、ババァ。全員欠席だぁ？ちゃんといるじゃねーかよ！何で、欠席にされなきゃならねーんだよ！」

それは、鈴木一哉。鈴木君は、中学生だと言うのに髪の毛は金髪だった。
「ババァじゃないでしょ？それに、授業中だというのに、うるさくしているんだから、授業に欠席しているのと同じだわ。欠席にされたくないんだったら、静かにしなさい！」
冷静に反論したのだが、鈴木君は、より一層興奮したようだ。
「なんだとぉ？何で、お前の指図を受けなくちゃいけねぇんだよっ！えらそうな口利くなっ！」
「そーだ、そーだ！」
私の言葉に、鈴木君はすぐに反論した。しかも、それに他の生徒も同調している。さすが、問題児の塊だ。一体、どんな親がこの子達を育てたんだろうか・・・。親の顔が見てみたいとは、こう言う事を言うんだろう。
「ちょっとぉ！静かにしなさいよねっ！先生は、何も間違った事言ってないんだし！」
これは、福島さんの台詞だ。福島さんは、成績が悪かっただけで、他に問題はなかったのだ。本当は、そのまま近くの公立中に行くはずだったのに、これでは勉強についていけないと思ってここに来たそうだ。白田さんも全く同じ。二人は、同じ小学校に通っていたんだけど、二人はダントツで成績が悪かったらしい。
「何だよ。お前、こいつの味方するのか？」
こ、こいつ？　教師に向かって、鈴木君は堂々と「こいつ」と言った。
「こいつって言い方は、無いでしょ。先生と言いなさい」
すぐに、私は反論したのだが、
「うっせー、ババァ！」
想像以上に、この学校はすさまじい。教師が目上の人間だと全く理解していない人間の寄せ集めなのだろう。
「ちょっと、好い加減にしてよ！それよりも、もうこんな人たちはほっといて、授業進めてください」

これは、白田さんの台詞だ。白田さんと福島さんだけだ、私の見方をしてくれるのは。
鈴木君に同調する生徒。それすら無視して友達同士でおしゃべりを続ける生徒。眠っている生徒。漫画を読んでいる生徒・・・そして、私の見方をしてくれる生徒。本当に、バラバラだ。
私は、白田さんと福島さんのために授業を進めようと思った。
「何だよ。点数稼ぎか、お前。いやらしい奴だなぁ。あぁ、やだ、やだ」
鈴木君はどこまでも、授業を妨害するつもりなのだろうか。福島さんと白田さんにかみついている。
「とにかく、もう授業を進めるわよ。時間がもったいないんだから」
そう言って、私は無理やり授業を開始した。そして、白田さんと福島さん以外は欠席にした。

ナイフにご用心6

一方、久保先生はと言うと・・・。
「はい、では授業をはじめますね。」
生徒たちは、休み時間と同じようにしゃべり続けているのに、注意もせずに授業を進めているらしい。想像できてはいたけれど、本当にそうだと思うと、悲しくなった。では、体育はどうなってるんだろう？　授業中、職員室の窓からチラッと校庭を見てみた。
「では、今日はサッカーです。グループ分けは自分たちでやるように。では、ウォーミングアップをかねてラジオ体操をしましょう。」
そう体育の教師は言ってはいるものの、ラジオ体操をしているのは先生だけで、生徒たちは黙々とグループ分けをして勝手に試合を始めてしまった。
体育も真面目に受けてはいなかった。こんなんだから、福島さんたちが不安になるのだろう。この学校は、生徒たちのことをちゃんと考えているのだろうか。
せめてもの救いと言えば、大塚先生の勤めてる隣の学校って事だ。大塚先生の勤めている学校も私の勤めている学校と最寄り駅は同じだ。駅の目の前に本屋があるので、私は毎日のように、本屋で立ち読みをしている。

学校の帰りに、今日も駅前の本屋で立ち読みをした。今日こそは、大塚先生に会えますようにと、そう心の中で強く思いながら立ち読みをしていた。
しかし、今日も大塚先生は来なかった。
だんだん学校に行くのが怖くなってきた。いつ行っても授業中に静かにしてくれるのは白田さんと福島さんだけだ。あとの生徒は絶対に授業なんて聞いてくれない。せっかく念願の中学校教師になったけれど、あまりの相手の手ごわさに後悔しつつある。

職員室で放課後、考え事をしていると、久保先生が近づいてきた。
「あの、田辺先生。どうですか？　少しは慣れましたか？」
申し訳なさそうに久保先生は言った。
「全然、慣れませんよ。授業中は、いっつもうるさいし。どこのクラスに行っても全然だめですねぇ」
私が副担任を勤めているクラスは白田さんと福島さん。他のクラスにも一人か二人は大体真面目な生徒がいる。とは言え、一クラスに一人か二人しかいない。
「そうですかぁ。やっぱり、なかなか慣れませんよねぇ。特に、田辺先生の場合は新採用でこの学校ですから」
気を使っているらしい。久保先生は、続けて言った。
「僕もなかなか慣れませんでしたよ。この学校の噂は聞いていたんですけどねぇ。心の準備だってちゃんとしてたつもりだったんですよ。でも、なかなかこの雰囲気には慣れませんでしたよ。今でもちょっと怖いものを感じてるんですけどね」
その言葉は、聞く前からわかっていた。と言うのも、久保先生はいつもおびえながら廊下を歩いているし、職員室にいるときでさえもやはりおびえているように見える。
「なかなかなれないとは思いますけど、頑張ってくださいね。そうだ、今日の帰りにちょっと飲みに行きませんか？」
どうやら、飲みに誘いたかっただけらしい。しかし、気弱になりつつある私は、どうしても大塚先生に一目だけでいいから会いたいのだ。
「ごめんなさい。また、今度にしてもらえませんか？」
「そうですかぁ・・・。じゃあ、明日はどうでしょうか？」
久保先生は諦めることなく、私を誘い続けた。
「ごめんなさい。他の人を誘ってください。しばらく、お酒は飲みたくないので」
はっきりと断ってしまった。
「そうですか・・・」

そう言って、少し肩を落として久保先生は、自分の席に帰って行った。少しきつく言いすぎたかもしれない。

ナイフにご用心7

久保先生の誘いを断り、いざ本屋へ。
今日こそは、今日こそはと思って本屋に行った。ここ一週間、立ち読みだけしている。しかも、毎回3時間くらいいる。ということもあって、だんだん店の人からの冷たい視線を感じるようになった。
大塚先生に「会いましょう！」って言っても全然会ってくれないのだ。
私だけが会いたいと思っているだけなのかもしれない。大塚先生は、私のことを女性として見ていないのだろう。たとえそうだとしても、私はどうしても大塚先生に会いたいのだ。
偶然会ったということになれば、大塚先生だって怒ったりはしないだろう。
そう思いながら待つこと1時間。
「あれ？」
誰かが私に話し掛けてきた。私は、持っている本を静かに閉じてゆっくりと声のほうを見てみると・・・
「大塚先生！」
そこには大塚先生がいた。中学の教育実習時代の時と比べると、男らしく、より一層素敵な男性となっていた。
「田辺、田辺じゃないか。そうか、お前、若葉台だったもんなぁ。」
大塚先生は、ちゃんと覚えていてくれたのだ。私が勤めている学校のことを！
「そうだ、お前、飯食ったか？」
感激していると、大塚先生は冷静にそう言った。
「ううん。食べてないよ。先生は？」
「俺も食ってないんだよ。飯でも食いに行くか」
「うん！」
うれしさのあまり、私は大きく首を縦に振った。

大塚先生は、駅から歩いて数分のところにある小料理屋へ連れて行ってくれた。中に入ると、サラリーマンらしき人たちばかりで賑わっていた。大塚先生は、こういうした街っぽい情緒のあるところが好きなのだろうと想像した。

「ねぇ、先生。いつも手紙で会おうって誘っても全然会ってくれなかったじゃん」

「あぁ、忙しくてさぁ。お前が指定してきた日はいっつも結婚式か見合いが入ってたんだよな・・・あっ！」

「えっ？先生、お見合いしてたの？」

私は、いつも大安吉日の日曜日ばかりを指定していた。と言うのも、何か良い事がありそうな気がしてそうしていたからだ。それが裏目に出ていたようだ。

「あぁ・・・、何かかっこ悪いな」

「そんな事無いって！」

大塚先生は、どうやら自分がお見合いしていたことを隠しておきたかったみたいだ。

お見合いをしているということは、彼女がいないということだろう。と言うことは、もしかしたら、私にもチャンスがあるのかもしれない。

「この年になるとさぁ、周りもどんどん結婚していっちゃってさぁ。焦ってくるんだよなぁ。まぁ、焦ったからって良い結婚ができるってわけでもないのにな」

元気のない声で、肩を下げ、大塚先生が言った。

「そうだよ、そうだよ。幸せな結婚ができればさあ、別に焦って結婚する必要も無いでしょ！」

「まあな」

大塚先生は、ビールを一口飲んでそう言った。

「それより、田辺、学校の方はどうだ？慣れてきたか？」

聞かれそうだと思っていた質問。だけど、あんまり聞いてほしくはなかった。

「全然慣れない・・・」
私は、下を向いてそう言った。
「入ってびっくりした・・・、あんなに変な学校だったなんて・・・」
学校内のことを思い出した。授業にならない教室、やる気のない教師たち。輝かしい教師生活を夢見ていた私の理想を大きくぶち壊されてしまった。
「そうかぁ・・・。噂ではとんでもない学校だと聞いていたんだけどなぁ。部活でも全然若葉台とは交流が無くてな。あまり、活動的に部活はやってないらしいが」
大塚先生は、バドミントン部の顧問をやっている。そう言えば、うちの学校ってバドミントン部がなかった。
「うちの学校、バドミントン部無いしね」
「確かに。それに、他の先生に聞いても大会にも出場してないって聞いたんだよ」
そう言えば、うちの学校って運動部も文化部も大会には出場してないみたいだ。一応、部活はあるけれど、お遊び程度らしいし。
「生徒はどうだ？何か、問題児が多いとかって聞いたんだけどさぁ・・・」
隣の中学に勤務しているだけあって、大塚先生はうちの学校に結構詳しいみたいだ。
「えぇ、その通りで、授業は大変だよ。真面目な生徒なんてほとんどいないから」
「そっかぁ。まぁ、何かあったら遠慮無く相談しろよな。俺も出来る限りの事はしてやるからさぁ」
遠慮なく相談ができると言うことは、大塚先生とこうして食事に行く機会が増えるととってもいいだろう。
うちの学校がとんでもない学校だったのが、かえって良かったのかもしれない。これで、大塚先生との距離が近づくかもしれない。
「うん！遠慮無く相談する！」

ピカピカの笑顔で言うと、大塚先生は微笑を浮かべながらビールを飲んだ。

ナイフにご用心8

さて、あの早川君が、事件に巻き込まれることになってた。物騒なものを持ち歩いていたからだろう。

早川君は、いつも塾に行くと偽ってゲームセンターに行っていたのだ。親からもらう月謝は、全部ゲームセンターで使い果たしていた。早川君の両親はと言うと、そのことに全然気がついていなかった。それどころか、早川君のことを信じきっていたのだ。

実は、早川君は小学生の時から同じことをやっていた。うちの学校に来てしまったと言うのも納得する。一向に早川君の成績が上がらないにもかかわらず、早川君の両親は何も言わず、早川君を自由にしすぎたのだろう。

先日も、いつも通り、塾に行くと偽ってゲームセンターに行くと、クラスの子がいたのだ。

「あ、早川じゃん。あの田辺を刺そうとした。」

それは、風間和夫だった。風間君は、小学校の時にいつも授業中はうるさいわ、言うことを聞かないわで大変な子だったとか。それで、うちの学校に来たらしい。

風間君と一緒に鈴木君もいた。悪い二人でゲームセンターに行ってたのだ。

「うるせー」

早川君の虫の居所が悪かったらしく、風間君の言葉に激昂してしまった。

「何だと？もう一度言ってみろよ！」

今度は、風間君がキレたのだ。隣にいた鈴木君はと言うと・・・。

「おい、あんまりかかわらないほうが良いんじゃねーか？変なことを言うと、刺されちまうぞ。ハハハッ！」

鈴木君は、冗談半分にそう言った。しかしそれが、早川君を壊してしまったのだ。

「何だとぉ・・・」
興奮した早川君はジャケットのポケットに入れていたナイフを出した。
「やる気かよ」
風間君が見下すような目つきで、早川君を挑発してしまった。
しかし、それを見ていたゲームセンターの従業員の一人が止めてくれたのだった。
「君達、何をやっているんだ。それ以上やったら警察を呼ぶぞ！」
この言葉に、三人は我に返ってそれはそこで終わったのだ。
しかし、これで終わればよかったのだが、そうはいかなかったのだ。
次の日、学校で三人は本当の事件を起こした。

ナイフにご用心9

「おい、早川・・・」
放課後、体育館の裏に、鈴木君と風間君が早川君を呼び出した。
その時、早川君はもちろん、ナイフを持っていた。
白田さんは、掃除当番でゴミを捨てに行った時に偶然、その現場を見てしまった。すぐに、白田さんは福島さんと一緒に私のところに来て、そのことを教えてくれた。
白田さんは、早川君と風間君、鈴木君が睨み合っていて、しかも、早川君がナイフを持っていたと知らせてくれた。
風間君は、早川君を挑発した。
「何だよ、お前。ナイフがないと何も出来ないのかよ」
続くように、鈴木君も早川君を挑発してしまった。
「そうだよ、いつもナイフを持ち歩いてるじゃねーかよ」
早川君は、もちろん、その言葉に怒っていた。
その時、私は急いで白田さんと福島さんと一緒にその現場に向かおうとしていた。その中に、久保先生もいた。と言うのも、廊下をかけていたところで、偶然、久保先生に遭遇し、一緒に行くことになったのだった。
「てめぇ・・・」
それは、小さな声だった。
「何だよ、聞こえねーよ。」
鈴木君が、またも挑発した。二人は、早川君が本当に刺してくるとは思っていないのだ。以前、早川君は私には刺そうとしていた。その現場を二人は見ていた。しかし、あれは本当に刺そうとしてやった事ではなく、強がりでやっただけだと二人は思っていたのだ。
「ふざけんなー！」
早川君が切れた。二人に向かって、ものすごい勢いでナイフを突き出していた。

と、その時！
「止めなさい！」
私が叫んだ。久保先生が早川君を止めに行った。久保先生は、私の言葉に早川君が驚いている間にナイフを取り上げた。
白田さんと福島さんは、後ろで怖がっていた。
「早川君！風間君！鈴木君！一体、何をやってるの！」
私は、興奮していた。早川君が、懲りずにナイフを持ち歩いている事、それに挑発した二人。
「田辺ちゃん。」
風間君が、馬鹿にするような目つきで私を見ている。
「た、田辺ちゃんって・・・」
この緊迫した現場で、よくそのような軽々しいことが言えたものだ。その横で、早川君の腕を思いっきりつかんだままの久保先生もその言葉に反応してしまった。
「田辺ちゃんだって？田辺先生と呼びなさい！」
怒って言ったのにもかかわらず、風間君は全然懲りていない様子だった。
「良いじゃん。その方が親しみが湧くしさぁ。若いんだしさぁ、田辺ちゃんは」
大学を卒業したばかりだから、若いのは仕方がないが、それだけで生徒たちに見下されるとは。早く年を取りたいと思ったと同時に、彼らをこれからどう教育していくか、どう教育すべきかと思った。
「まぁ、呼び方はこの際どうでも良いです」
私達は自分の教室に行った。
「どうして、早川君は二人にナイフを突きつけたりなんかしたの？」
私のその言葉から始まった。
早川君は、なかなかクラスになじめず、友達がいなかったのだ。それが、かっこ悪いと思った早川君は、かっこ良いナイフを買い、それを見せびらかして友達を増やしたいと思っていたのだった。しかし、なかなか見せる機会が無く、焦ってきて自分で自分を抑えら

れなくなってきていたのだと言う。そして、それが爆発してナイフを突きつけてしまったのだ。

「怪我人が出なくてよかったけど、一歩間違えたら大変な事になっていたのよ」

早川君を注意した。

風間君と鈴木君は早川君の本心を聞いて納得してくれていた。自分も早川君の立場だったら同じ事をしてたかもしれないとも言った。そして、みんなで本音トークを続けた。ここにいる生徒たちは仲良しグループになった事は言うまでも無い。

三者面談1

私のクラス――他のクラスもだが――には、来ていない生徒が多い。三十人クラスだが、そのうち来ていない生徒は十二人。小林先生に「来るように呼びかけてみては？」と言う事を何度も言ってはみたものの、もちろん、受け入れてはもらえなかった。でも、私は、どうしてもみんなに学校に来てもらいたいと思い、三者面談をやろうと思ったのだ。

普通の学校だったら、三者面談どころか、家庭訪問をやる。私の学校は両方とも無いのだ。家庭訪問をやるには、生徒がいろいろなところから来ているだけに難しいかもしれない。だけど、三者面談だったら父母の方から学校に来てくれるのでこちらは可能ではないかと思った。

「小林先生。」

職員室で、小林先生にもう一度お願いしてみることにした。

「どうしました？」

「三者面談のことなんですけど・・・。」

まだ、そこまでしか言っていないのに、小林先生はすぐに返してきた。

「あぁ、それだったらやりませんよ。うちの学校はそう言う事はやらないことにしてるんですから。やるのは三年生だけですよ。」

小林先生は、私と目を合わせようともしなかった。三者面談をやるのは三年生だけというのが、この学校の方針なのだ。それを変えることはできないということらしい。

肩を落として自分の席に戻ると、久保先生がやってきた。

「田辺先生、無理ですよ。ここの学校は、一、二年生は生徒と先生の二人で面談をやるだけなんですよ。それだって、強制じゃないから誰もやらないと言うのに。」

この制度自体がそもそもおかしいと思う。生ぬるいことをやって

いるから、教師はなめられっぱなしになるのだろう。
「久保先生は、それで良いと思っているんですか？」
私は、強く久保先生にそう言った。久保先生は、後ずさりして、引きつった顔になった。
「はぁ・・・、そりゃあ、良いとは思いませんけど、それが学校の方針なんで・・・。」
気が弱い久保先生らしく、学校の制度を変えようとは言ってくれなかった。
「それだから、この学校は変われないんです。私は、やりますよ、何が何でも。そして、クラス全員が集まれるようにするんです！」
力強く握りこぶしを天井に突き上げ、言った。
「確かに、僕だってそうしたいんですよ。でも、生徒が引き受けないと思いますが・・・。」
背を丸め、久保先生は軽く頭をかいた。

家に帰ると、まだ学校に来ていない生徒に手紙を書くことにした。安月給には厳しいが、自腹で切手代も払わなくてはならない。経費としたいところだが、あの学校のことだ。経費にしないうえに、三者面談自体をつぶされかねない。
私は、一日で書き終えると、次の日の朝にポストに投函した。

三者面談2

授業中はと言うと、いつも通り、うるさいのだった。しかし、真面目な生徒が増えてきた。ナイフ事件の早川君、風間君、鈴木君も真面目な生徒に入り、私のクラスは五人が真面目に授業を受けてくれるようになった。しかし、この三人は他の授業でも真面目かどうかはわからない・・・。

放課後、この五人が教室に残って話をしていたのを見つけて、教室に入った。

「あ、先生。」

福島さんが言った。他の生徒たちも私を快く受け入れてくれた。

「ねぇ、まだ一度も学校に来てない生徒がいるじゃない？みんなは、その生徒達にも学校に来て欲しいと思うわよねぇ？」

5人の前で私が、そう聞くと、風間君はけだるそうに自分の机に肘をつけ、足をだらりと伸ばしながらもしっかりとした口調で言った。

「でもさぁ、この学校に来てる人の中には、小学校の時に不登校だった人もいるからねぇ。そう言う人たちは、来ないんじゃないのかなぁ。」

妙に納得する台詞だった。風間君は、もっとだらしない子かと思っていたけど、思ったよりも確りしていて嬉しかった。

風間君がそう言った後に、白田さんが他の子の席に座り机を爪で器用にたたきながら言った。

「そうだけど、一生家に閉じこもったまま生きることなんて出来ないんだし、学校に来た方が良いと思うよ。」

ここにいる生徒たちは、私の心の中を知っているのだろうかと思うようなことを言ってくれている。みんながそろった教室にしたいという気持ちを持っているのは私だけではないようだ。

「そうだよねぇ。それに、クラス全員がそろった写真とか撮りたいしね。」
福島さんが、机の上に座り腕組みしながらため息交じりに言った。
「でもさぁ、来ると思うか？それに、どうやって連れて来るんだよ。」
早川君が頬杖をつきながら言った。
「ねぇ、早川君はさぁ、友達がなかなか出来なくて苛々してたじゃない？全員そうだとは限らないけど、来ていない生徒の中には、友達が出来るかどうか不安で来ていない生徒もいると思うんだよ。」
私が、そう言うと、風間君が嫌そうな顔で言った。
「もしかして、俺たちに何か手伝わせようとしてるんじゃ・・・。」
意味深な表情を作って言ったせいか、風間君が私の言いたいことを言ってくれた。
「よくわかったわねぇ！そうなのよぉ。」
と言うと、白田さんと福島さんは結構、ノリノリだった。男の子達は、嫌そうな顔をしていた。
「ねぇ、先生、どうやって連れてくるつもりなの？」
福島さんが、身を乗り出して聞いてきた。白田さんが首をかしげた。
「私達は、何をすれば良いの？」
鈴木君は机の上に両足を乗せて、
「何で、俺たちがそんなことをしなくちゃいけねーんだよ。」
不満そうに言った。風間君、早川君は頷いていた。
「この作戦はね、まず、どうして来ないのかをアンケート調査するのよ。それで、来ない理由を教えてもらって、そこで一人一人作戦を考えていこうかなと・・・。」
「ふうん・・・。」
福島さんと白田さんは、納得したように見える。真剣な顔でお互いを見あっている。男の子達はというと。
「その理由が、何と無くとかだったらどうするんだよ。」

早川君の台詞だった。確かに、そう言う子もいるだろう。
「そう言う子にはね、貴方達に来るように説得して欲しいのよ。私よりも生徒の気持ちが分かると思うしね。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0343d/

田辺先生の事件簿

2011年11月21日21時42分発行